

# 勉誠通信

Bensey Newsletter 第二十八号

2010.12.16

小論・研究余滴・随想

他者化をこえて

可視化された方

匡房伝を記す前に

振り返れば私がいる

―早稲田大学に入学す (三)

すし (二)

―くいものの語源と博物誌―



川口幸大

長沼さやか

磯水絵

立松和平

小林祥次郎

## 近刊ニュース

- ・『戦争を知らない国民のための日中歴史認識』
- ・『伴大納言絵巻 冷泉為恭 復元模写』
- ・『戦国残照 お江とその時代』
- ・『やるなら決めよ 決めたら迷うな』
- ・『戦後派作家たちの病跡』
- ・『長恨歌 楊貴妃の魅力と魔力』
- ・『関流和算書大成―関算四伝書―第三期』
- ・『明治唱歌の誕生』
- ・『謡曲画誌 影印・翻刻・注解』
- ・『遊学 137ア 『東西文化交流におけるイラン文化』』

小論・研究余滴・随想など本誌にお寄せ願います。

勉誠通信 バックナンバー

<http://www.bensey.co.jp/mm.html>

# 他者化をこえて——『中国における社会主義的近代化——宗教・消費・エスニシティ』刊行に寄せて

川口幸大

(東北大学准教授)

において、という意味でだ。

## 日常の問いかけ

例えば中国に暮らす人は毎日どんなものを食べているのだろうか？ ラーメン？ 餃子？ それは全く的外れな答えではないけれど、やはり実状を完全にとらえてはいない。

どんなところで、どんな買い物をしているのだろうか？ どんな神様に、何を祈っているのだろうか？ そもそも、一口に中国と言っても、どこもみな同じことが当てはまるのだろうか？

これらは、中国の人や外国の人に限らずとも、自分以外の誰かと少しでも実際に関わりをもったとしたら、即座に知ることになる事柄のあれこれだろ

という接頭語を置いたかたちであれ、かの国が社会主義という、われわれとは異なった社会のシステムを依然堅持しているという認識がある。

## 相互理解のために

もちろん人間には一人一人個性があるように、国や社会もそれぞれに違いはある。しかし、そこに厳然たる境界を設けて、ことさらに相手を他者化してしまえば、想像力は不活性化し、ついには思考停止に至ることだろう。まずは、お互いによく知ること。そして境界線をいったん棚上げにし、凝り固まったイメージを解きほぐしたうえで、相互の理解にのぞむこと。

本書は、こうしたスタンスで、中国の、とりわけ社会主義についてのアプローチを試みている。特に切り口として、宗教、消費、エスニシティに着目した。いずれも、過去数年の間に中国に長期間住み込んでフィールドワー

⇒目次に戻る

「大きなニュース」が駆け巡る。おそらく後々までも記憶されるであろう暑い夏がようやく終わり、季節が秋へと移り変わるうとしていたころ、日本と中国との間は何かと騒々しいニュースで持ちきりだった。

尖閣諸島をめぐる事件に始まり、中国各地での反日デモ、それに外交の場でのぎくしゃくしたやりとり。そのちよほど合間には、劉曉波氏のノーベル賞受賞の知らせも報じられた。そして十一月の半ばからは、広州市でアジア大会が開催されている。日本で暮らすわれわれは、何らかのかたちであれ、中国のことを見たり聞いたりしない日はないと言ってもよいかもしくない。ただし、いずれも「大きなニュース」

「そして、その根底には、「特色ある」



祖先の墓に参る

建設中のアジア大会選手村



う。いつしよに食事をしたり、街を歩いたりするような場を考えてみればいいかもしれない。

## 他者化と社会主義

しかし、「大きなニュース」で報じられる事柄についてはよく知つていても、われわれは彼／彼女らにこうしたクを行った執筆者たちが、現代中国社会を知るうえで極めて重要だと考えるキーワードである。本書が、よりよい相互理解のきっかけとなることを、執筆者一同心より願っている。



# 可視化された力 —中国社会に生きる人々の思い—

長沼さやか

(日本学術振興会特別研究員／東京外国語大学)

## 尖閣問題から見てきたこと

二〇一〇年は、中国をめぐる出来事が数多く取り沙汰された一年であった。上海万博が七千万人超の入場者数を記録し、盛況のうちに閉幕したこととさき少し前のことのように感じられる。それよりも記憶に新しいのは、万博会期中の九月下旬に尖閣諸島沖で起きた漁船衝突事件であろう。日中両国はぎくしゃくしながらも事態の收拾につとめたが、政府の思うところをよそに問題は後引き、中国では反日運動の過激化、日本では機密動画の流出事件へと発展するに至った。

こうした一連の経緯を追ってみると、尖閣問題はナショナルな権威だけではおさまらないもう一つの大きな力

の存在を可視化したように思う。それは日本と中国、それぞれの社会に暮らす人々の存在である。インターネットの掲示板で呼びかけられた中国の反日運動、同じくインターネットサイトを經由した日本の動画流出事件は、誰もがアクセス可能なメディアを通じて個人的に発せられた情報が、国家間の関係に影響を及ぼし始めたことの現れであった。

しかし、公的に明かされる政府の見解は知り得ても、その国に住む人々が何を思っているのかを理解する材料を私たちはあまり持ち合わせていない。それゆえ、反日運動の激化をある種の不気味さをもって見ていた人も少なくないだろう。

に意見を求めた。彼女のような政治に身近な党員に限らず、中国で実施されている政策が日本にもあるのかどうかを知りたがる人は多かった。

「日本では子どもを何人うめるの？」  
「人口政策はあるの？」

出会った人からよくそのような質問を受けた。私が「何人という制限はない」と答えると、うらやましそうにため息をつく人もいた。子孫を増やし、一族を繁栄させることこそ幸福と考える中国人にとつて、一人つ子政策はなおジレンマなのだ。

そうしたやり取りから読みとれるのは、厳しい政策のなかに生きる人びとの葛藤、そして何よりその国のなかで

あなたは好き。だけど日本は嫌いだ  
中国で友人からこんなふうに言われたことがある。

「あなたのことは好きだけど、日本は嫌いです」

二〇〇二年、文化人類学を専攻する博士過程の学生だった私は、長期フィールドワークのために滞在していた中国広東で、人間関係を築こうと四苦八苦していた。そんな折、仲良くなつた四歳年下の中国人女性から言われたのがこの言葉だった。

彼女は一九八〇年生まれで、当時は二〇歳を少し過ぎたくらいの年齢だった。共産党員の父を持ち、自分も党員となつてからは政府職員として働いていた。彼女が言わんとしたのは、私のことは友人として好きだが、日本という「国」は嫌いという意味だった。初め、私はその言葉をとても残念に受け止めたが、やがてそれは彼女の持つとも率直な思いなのだと思えるように

生きる人々のリアルな日常であった。それはすなわち「国」のみならず、そこに生きる人々へのまなざしを絶やしてはいけないということなのである。

## 『中国における社会主義的近代化』

このほど『中国における社会主義的近代化—宗教・消費・エスニシティ—』が刊行される。中国に暮らす人々は日々何を思い、何に嘆き、何を求めながら暮らしているのか。そうした疑問に果敢に向き合った本書が、隣国の住人として同じ目線に立ち、中国社会を理解することのきっかけになればと思っている。



## 蟻族

高学歴ワーキング  
プアたちの群れ

廉思 編／関根謙 監訳  
四六判上製・定価二五二〇円(税込)

好評につき、3刷り出来。  
新聞各紙に書評多数掲載されました。

政策と生活のはざま  
一方で彼女はときに、小さな声で共産党批判を口にした。党員でも一部の人間しか出世できないシステムの問題、政治パフォーマンスの無意味さを訴え、日本の政治はどうか、日本人の目から中国はどう見えるのかと私

社会現象化する「働けない若者」の実態。  
高学歴、弱小、群居……

中国で社会現象となっている高学歴ワーキングプア集団「蟻族」。高度成長の裏側で深刻化する、就職できない若者たちの実態に迫る。中国でベストセラーとなった注目の書、待望の翻訳！



# 中国における 社会主義的近代化

宗教・消費・  
エスニシティ

小長谷有紀・川口幸大・長沼さやか 編  
A5判上製・定価四二〇〇円(税込)

中国の人々ほどのような価値観を持ち、  
いかに日常を生きているのか。  
隣国理解のための最大の鍵である。「社会主義」という多面体を、  
宗教・信仰、消費システム、少数民族問題というアプローチから、  
民衆の暮らしのなかに読み解く。常に最大の関心事である  
中国と偏見なく対話するために、  
私たちは「他者のまなざし」から自由にならなければならない。

# 戦争を知らない国民のための 日中歴史認識

『日中歴史共同研究〈近現代史〉』を読む

笠原十九司 編  
A5判上製・定価二六二五円(税込)

尖閣問題、反日デモ、南京大虐殺、従軍慰安婦、靖国参拜、  
歴史教科書……  
隣国理解の鍵はすべて「歴史」のなかにあり、対話を求める  
「未来」のなかにある。

四年をかけて成立した「日中歴史共同研究」の意味を問う。  
国民にひろく伝えられるべき研究成果が、  
政治問題を沈静化させる手段としてのみ  
用いられようとしている。  
日中両国の歴史教育・報道・研究姿勢の問題を検討する。



## 序 小長谷有紀

第一部・宗教と信仰をめぐるポリティクス  
廟と儀礼の復興、およびその周縁化  
上海におけるプロテスタントの宗教空間  
中国共産党のイスラーム政策の過去と現在  
現代中国における墓碑の普及と孝子たち

## 第二部・社会主義を消費する、社会主義が消費する

商品化される社会主義  
都市景観の再生計画と住民の選択的参与  
オランラムチル現象にみる内モンゴル・インパクト シンジルト  
第三部・エスニシティ・アイデンティティの語り方/語られ方  
ウイグル族と「漢化」  
欺瞞と外部性  
現代中国における宗族新興の可能性

高山陽子  
河合洋尚  
川口幸大  
村上志保  
澤井充生  
田村和彦



⇒ 目次に戻る

# 匡房伝を記す前に

## 磯 水絵

(二松學舎大学文学部教授)

十三世紀に成立した説話集『宇治拾遺物語』に、「随求陀羅尼額に籠むる法師の事」(一一五)と題する話が載っている。それは次のような内容であるが、そこに登場する事件の目撃者「江冠者」を、筆者の恩師貴志正造は大江山房だと言った。

日頃、白山に修行しているとい  
う触れ込みの山伏が市中の人の家  
に現れ、今度は金峰山に二千日お  
籠りするから食料を寄進してほし  
いと言った。家の侍たちがその山  
伏を見ると、おでこに六センチく  
らいのまだ生々しい傷がある。そ  
こでその理由を尋ねると、山伏は  
さもおごそかな声を作って、「これ  
は随求陀羅尼の呪文を籠めたもの

である」と答えた。侍たちが、手  
足の指を祈誓のために切るとはよ  
く聞かぬが、額を破って陀羅尼を籠  
めるとは大したものだと感心する。  
と、十七、八歳の小侍が不意に走り  
出てきて、とんでもない真相を語  
った。あきれて人々がその山伏を  
見ると、山伏は少しも慌てずに、「そ  
のついでに籠めたのだ」と、しれ  
つと言ったから、見物はどつと笑  
った。すると、そいつはその隙に  
逃げてしまったそうなの。  
その「とんでもない真相」を以下に  
原文で記すが、小侍は次のように語っ  
たという。  
あな、かたはらいたの法師や。  
なんでふ随求陀羅尼を籠めんする

ぞ。あれは七条に、江冠者が家の  
大東にある鑄物師が妻をみそかみ  
そかに入り臥し入り臥しせし程に、  
去年の夏入り臥したりけるに、男  
の鑄物師帰り合ひたりければ、取  
る物も取りあへず逃げて西に走る。  
冠者が家の前程にて追ひつめられ  
て、縛して額を打ち破られたりし  
ぞかし。冠者も見しは。  
(なんと、笑止千万な坊主め。なんで随求  
陀羅尼なんかを籠めてあるもんか。あの  
坊主は七条町で、わたし、江冠者の家の  
真東に住む鑄物師の妻を、かねがねこつ  
そり忍び込んで寝取っていたのが、去  
年の夏、入り込んで寝取るところに、夫  
の鑄物師が帰り合せたので、取る物も取  
りあえずあわてて逃げて、西の方へ走った  
ものの、わたしの家の前あたりで追いつめ  
られて、鋤で額を打ち割られたというわけ  
さ。わたしも見ていたぞ。)  
(小学館 新編日本古典文学全集)

その真相を語った十七、八歳の小侍が、つまりは「江冠者」で、その「江冠者」こそが、これから語ろうとしている大江匡房の若き日の姿だと師は指摘したのである。『宇治拾遺』のこれまでの注は、「江冠者」が誰であるかは「不詳」としており、単に、「大江氏のなかにあつて元服して冠をつけるようになった少年」くらいにしか誰も解釈していない。確証はないからそれ以上には言えないのであろう。しかし、『宇治拾遺』初学者であつた筆者に、四十年前の師の言はいまだに印象深く残っている。そうして、匡房を知れば知るほどに、それは筆者にも確信に近いものになつてきている。

さて、この話を分析すると、真相露見の部分は、本来十七、八歳の小侍の語りである。したがつて、「江冠者が家の大東にある鋳物師が妻を」は、「己れが家の大東にある鋳物師が妻を」とでも、また、「冠者が家の前程にて」、「冠者も見

ころではなかつたかと思う。なにより、『古事談』(五一―四七)には、「但し匡房卿いまだ無職にて江冠者としてありけるを」(新大系本)とあつて、それと同じ逸話を『十訓抄』(一一―二二)も載せているから、中世初期においては、「江冠者」といえば匡房その人と周知されていたことになる。同時代の類書にそうあることを無視して、『宇治拾遺』中の「江冠者」を不詳としてよいものか。というよりか、むしろ、当時の読者が『古事談』や『十訓抄』を読んでいれば、『宇治拾遺』のそれを匡房と見たであろうことは想像にかたくない。両書を仮に知らなかったとしても、当時の常識として、「江冠者」は匡房を指していたのだから。

晩年に『江談』を遺すことになる匡房の性格形成を考えるに、その萌芽を先の話に認めるのは現代の私たちがかりではないと思う。当時の『宇治拾遺』の読者たちでも、あの匡房なら

しは」は、「己れが家の前程にて」、「己れも見しは」、あるいは、「我が家の前程にて」、「我も見しは」というように一人称の代名詞が当たつていたはずで、そうでなければ、「小侍が家の」、「小侍も見しは」と地の文にある人称がそのままに入るべきであつた。それなのに、なぜ、「江冠者」、「(江)冠者」とあるのか。それはつまり、報告者が「江冠者」であるところに意味があつたからではないか。そうして、それが他ならない匡房であると、当時は誰にも承知されていたからではないのか。

平安時代後期、京の東西の市は衰退し、繁栄の中心は町尻小路(現新町通)に移つて、七条大路との交差点、七条町には金属工や鋳物師が集まり住んでいたという。そんなあたりに青年期の匡房が住んでいたのか、どうか。そう考え出すといささか心もとないが、彼の父成衡は江家の文預り、つまりは書庫の管理者をもつて任じていた人物である(『江談抄』一―四八二―一七)。若き

ばこれくらいの経験があつてもおかしくないと思つたはずなのである。はやくに学問を修めた早熟な少年の物見高さ、好奇の目、語らずにはいられないその性格、いかにも匡房その人という感じがするではないか。あるいは、それは『江談』の番外篇なのかもしれないと筆者は思う。若い人を前にしてのしかつめらしい言談のあとには、今でいうコーヒープレイクがあつたに相違ない。そうした膝を崩してからの席における余談。この話はそのようなものと思われる。

なお、匡房については、川口久雄著、人物叢書一四八『大江匡房』(吉川弘文館、一九六八年)をはじめ、川口久雄・奈良正一著『江談証注』(勉誠社、一九八四年)解説及び略年譜、木本好信編『江記逸文集成』(国書刊行会、一九八五年)年譜及び解題等にまめて記されている。したがつて、匡房の全体像はそれらによつて見ていただ

日、どこに妻子を養つていたものか知れたものではない。また、後年立身した匡房が住んだ諸所と、その住居の位置は到底かさなるものでもない。

川口久雄は人物叢書『大江匡房』に、「江家の文預り」をもつて任じた成衡の居所として、二条高倉にあつた文庫、『中外抄』下(二)にいう、「二条北東洞院西」に位置した、いわゆる「歎冬殿」を指摘し、「この家で匡房も生れたのであろうか」とする。しかし、当時の子は母方において誕生し、成長したことが考えられる。後述するが、彼の母方の祖父は文章博士橋孝親である。母のもとにあつて、父は無論のこと、外祖父孝親の薫陶を受け、江家の子として恥ずかしくないように仕立てられたのちに、父のもとに寄りこされたとも考えられよう。

ともあれ、本当かどうか真偽の程は別として、少年期の匡房が語つた話であるというのが、先の話の肝心な点である。そこで、本書にはそれらに著されることのなかつた、匡房の別の側面を主に著すつもりである。刑事ドラマの謎解きよろしく、彼の周辺にあつた人物や、事件、時代背景を調べ上げることによつて、匡房像を浮彫りにしていこうというのが本書の眼目である。

また、『徒然草』第十三段には、「ひとり灯の下にて文をひろげて、見ぬ世の人を友とする、こよなう慰むわざなり」とあるが、本書をなすにあたつては、特に川口久雄の人物叢書をかたわらに置き、吟味や、自問自答を繰り返した。且つは、それが本書の上梓の遅れた理由でもある。大学三年次、専門研究の緒に就いた時からこの書は掌中にあつた。今もその影響から抜け出せない。したがつて本書は、筆者にとつてはあたたかも「見ぬ世の」川口氏との問答集ともなつたと言える。

(『大江匡房 碩学の文人官僚』より)



# 大江匡房 碩学の文人官僚

磯 水絵 著

四六判上製・定価三三〇〇円(税込)

平安時代後期の門閥貴族社会にあつて、実力で正二位権中納言大宰権帥にのし上がり、白河院政において力を発揮した時代の寵児・大江匡房。学者、歌人、説話の談話者でもあつた匡房の人物像に迫る。

匡房伝を記す前に

- 第一章 匡房の辞書的人物伝 — 匡房略伝 —
  - 第二章 歌人としての匡房 — その家系 —
  - 第三章 匡房、恩顧の人々 — 『暮年詩記』より —
  - 第四章 匡房の周辺 — 『統本朝往生伝』より —
  - 第五章 匡房の生きた宮廷社会 — 『江次第』より —
  - 第六章 匡房と音楽 — 当時の宮廷儀礼と音楽について —
  - 第七章 随筆家としての匡房
  - 第八章 匡房の言談 — 『江談』の世界 —
  - 第九章 まとめ — 『大日本史』の世界 —
- 主要参考文献  
使用図版一覧  
大江匡房略年譜  
あとがき



# 戦国残照 お江とその時代

志村有弘 編

四六判並製・定価二二六〇円(税込)

男たちの戦いの裏で展開した、命の継承をめぐる女たちの闘い — 歴史と物語の接点を現代視点で読み解く！

お江の父・浅井長政は、信長との闘いにより自刃。生き延びた母お市も越前・北之庄にて自刃。戦乱の世に生を受け、数奇な運命に翻弄されたお江は、三度目の婚姻により二代将軍・秀忠の正室となった。大奥での春日局と熾烈な暗闘、家康の背後で動く黒衣の宰相・天海。次代の将軍は忠長か家光か。歴史と文学をつなぎ、崇源院・お江と彼女の生きた時代を浮き彫りにする。

## やるなら決めよ 決めたら迷うな

石川 洋 著

四六判並製・定価一〇五〇円(税込)

托鉢者・石川洋が易しい言葉で伝える、人生を豊かにする話の数々

あなたが、人間関係に疲れたとき、子育てに悩んだとき、仕事がうまくいかないとき、生きる力を失ったとき……  
そつとこの本を開いてみてください。  
きつと乗り越える光が見えてくるはずです。



⇒ 目次に戻る

## 振り返れば私がいる — 早稲田大学に入学す(三)

### 立松和平

早稲田大学にいこうと思った。深い理由はなかったが、バンカラな校風がなんとなく私にあつていると思えたからである。

宇都宮高校の同級生四人と上京した。上野の旅館の部屋に四人ではいっても帰れるようにと半身になった気分、東北本線の終着駅の上野に宿をとつたのである。そのことだけでも、新しい世界に飛び出すことにどれだけ腰が引けていたかがわかる。

同級生たちはそれぞれ受験する大学が違い、朝になると別の方向に散つていき、夕方に宿に帰ってきた。幾分は修学旅行気分でいられたことも楽しかった。風呂にはいる時に「男人浴中」

という札を入口に掛けるようになっていた。裏返しにして「女人浴中」の札を掛けてはいっていると、女中さんがはいってきて、いたく叱られた。

「女の客が今はいないので、おかしいおかしいと思つていたら、やつぱりあんたたちだったのねえ」

私たちが裸でいるところにはいつてきて、大音声を発したのだ。女客がないとわかっているなら、わざとわざ中にはいつてきて確かめることでもないはずなのである。だがその女中さんとは親しくなり、受験が休みで昼間も宿にいる時など、掃除にやってきた女中さんとハタキでチャンバラをして遊んだ。

明日最初の受験だという夜、みんな

早目に床についたのだが、私は頭が痒えてしまつて眠れなくなった。旅館は「水月ホテル鷗外荘」といい、森鷗外の別荘が残つていた。不忍の池に面して、上野動物園とも接していた。

眠れない私の耳に、動物の吠える声が響いてきた。あれは虎が遠く離れてしまった故郷の森を忍んで檻の中で遠吠えをしているのだと空想した私は、想念が広大なジャングルに向かつたかのやうに広がり、ますます眠りから遠ざかつてしまった。壮大な森の木の下で身を潜めるように蒲団の中でじつとしてるうち、眠りにとらえられたのであるが……。

後年、上野動物園園長と対談したことがあり、夜騒然とした声で吠えるのは虎ではないですかと尋ねたことがあった。

「虎などの大型猛獣は、そんなに騒がしく吠えるということはありません。たまにウオーツと低い声で一声鳴

くだけ。あなたが聞かれたのは、きっとホエザルかアシカでしょう。一晚中元気に鳴いていますよ」

狭い檻やプールをいつたりきたりして吠えているホエザルやアシカではずいぶんイメージが違うのだが、遙かな故郷の森や海をしのんで鳴いているというイメージは変わらない。

私は私立大学三校を受けた。上智大文学部、慶応大文学部、早稲田大政治経済学部、法学部、商学部、文学部である。結局落ちたのは、最初に受験した上智大文学部と最後の早稲田大学文学部であった。地方の男子高からやってきた私は、上智大ではすぐ近くにきれいな女子がたくさんいて、いいおいがする。試験問題にはとても集中できなかつたのである。早大文学部は最後の受験で、それまで連日試験を受け、疲れ切り、嫌になってしまったのだ。

早稲田大学は第一次早大闘争の真最中で、校舎は学生に占拠され、受験が早稲田で何が起こっているのかは、しばしば新聞報道があるのでわかつた。占拠学生に対する新聞の論調は厳しかった。田舎に住んで新聞の報道しか知らない私は、大学を不法占拠する学生に反感を持っていた。早稲田大出身の国会議員が超党派で調停をしたりして、はつきりした記憶はないのだが、ほぼ一カ月後に入学式が行われたと思う。

私が早稲田に受かつたので、父は大変に喜んでくれ、入学式までついてきた。私は高校時代に着ていた学生服で、バツジを高校から早大のものに変えただけであつた。入学式の当日、式がはじまる前に、父が穴八幡神社の向かいにある帽子屋で角帽を買ってくれた。その時そばにいた人にカメラを渡して父とならんで撮ってもらつた記念写真が残っているのだが、父も角帽をかぶつた私も嬉しそうである。入学式は文学部にある記念会堂で行われた。

できるかどうか微妙な状態であつた。私は弱い立場の受験生であるから、受験ができるように祈っているしかない。直前に警察機動隊が導入され、学生たちは自主退去して、どうにか受験はできたのである。

大学のまわりはものしい雰囲気であつた。濃紺の戦闘服とヘルメットの機動隊員が周辺を少人数で隊列を組みパトロールし、大部隊が大学を取り囲んでいた。受験生は受験票を大学職員に提示し、ジュラルミンの銀色の桶を持つた機動隊員がつくる人垣の間の細い通路を通つて、試験会場の校舎に行く。警察機動隊をテレビでしか見たことのない私は、激動する社会というものにはじめて触れたような気分であつた。

昭和四十一(一九六六)年四月、私は早稲田大学第一政治経済学部経済学科に入学した。早稲田大学で、できた

人があまりに多くて、壇上でのセレモニーも何をやっているのかよくわからなかつた。

入学式会場前の広場には、サークルへの勧誘のブースがたくさんできて、ちよつと歩いただけでザラ紙のビラが掌の上にあまつていつた。もちろんその中にはスト参加を呼びかけるビラも、スト解除を主張するビラもあつた。放送研究会や茶道研究会や仏教青年会や落語研究会や、まことに多種多様である。この世界でこれから生きていくのだと思うと、楽しい気分であつた。

「おい、こいつ、いい身体をしているぞ。日本拳法部にはいらんか」

いきなり私は肩に手を掛けられた。その時私は肩幅が広く、がっちりとした体格をしていた。日本拳法は厳しいうで、私は入部する気はない。

入学式があつても、すぐにオリエンテーションがあつて授業がはじま

ら文学部にはいたいと思つていたのだが、落ちてしまったのだ。どうして再度気力を振り絞り真剣に試験問題を解かなかつたのだろうかと悔やんでみても、もう遅い。結局親や高校の先生がはいらぬ早稲田政経学部がいいとあまりにいうので、結局そのとおりにした。大学や学部選いで、どうも私はいいかげんであつた。政経にはいつたのだが、授業がはじまると、経済学はどうも私には向いていないと気づいた。

早稲田大学第一政治経済学部に入学をしたといつても、入学の手続きをただけである。受験の合格者発表がすでに機動隊が去つていくや、帰つてきた学生が再び大学を占拠した。受験の時は一時休戦という形だつたのだ。

私は一年生になることはなつたのだが、しばらく自宅待機ということになり、宇都宮の生家で入学式の案内が届くのを、運転免許をとるため自動車教習所に通いながら、待つたのである。

たわけではなかつた。校舎という校舎は、まだ机や椅子のバリケードで封鎖されていたからだ。新入生としてこれからどうなつていくのか、見当もつかなかつた。

私は本部前のキャンパスをぶらぶら歩いている時「早稲田キャンパス新聞会」に勧誘され、入会する署名をした。もともとジャーナリストになりたいという気持ちがあり、また大学内の騒動のこともよくわかつていないので、大学で何が起こっているかを理解したかつた。大学にいと「革命」という言葉がしばしば響いてくるのだが、その意味も表面のことしかわからない自分が物足りなかつた。そんなこともすべて勉強したいと私は思つていたので。

「早稲田キャンパス新聞会」の部室は、二十一号館裏にあつた。大隈講堂から大隈重信侯銅像とを結ぶ大学構内の中心線ともいふべき一番奥にあるの

が二十一号館で、その屋上をなお突っ切っていくと、何軒かの平屋木造のしもた屋がある。そこに演劇研究会や映画研究会や文章表現研究会の部室があり、「早稲田キャンパス新聞会」は最も入口に近い一軒家をそのまま使っていた。

新聞は一カ月に二度発刊され、学内の無人スタンドで販売された。売り上げ金はほとんど回収されなかったが、広告をとっているのが、無料で配るといのが全提であったのだ。

私は高校時代に写真部だったので、新聞会ではカメラマンをやることになった。もちろん先輩のカメラマンがいて、取材にはもっぱらその人が出かけていたから、私は写真部に予定されているというほどのものだった。もちろん一年生は準部員というところ、新聞づくりの第一線に立つのではない。卒業生の名簿を頼りに企業の前輩を訪ね、広告を出稿してくれるよう

依頼にまわったりした。一年生の主な仕事は、広告取りであった。

カメラマンの道を歩きたいという気持ちがあつて、私は写真部にもはいつた。有名なカメラマンを輩出している早大写真部は、私にはもうひとつの憧れであった。宇都宮高校で私は写真部長を勤め、卒業アルバムの制作にあたりた。暗室作業も好きで、地方の芸術祭の写真部門で入賞を重ねた。そのため写真大学か日大芸術学部写真科に進みたいと思ひ、ある日同居している両親にカメラマンになりたいと手紙を書いて居間のテーブルに置いておいた。朝起きてみると、両親が悲しそうな顔をしている。私は両親が満州から引揚げ苦勞に苦勞を重ねて私を育ててくれたことを知っているから、両親を悲しませないため普通の大学に行くことにしたのだ。

早大写真部ならサークル活動なので仕事とは別である。早大写真部は部員

## すし(二)——くいものの語源と博物誌——

### 小林祥次郎

#### ○河童巻き

胡瓜を芯にした細い海苔巻きをカッパ巻きと言うのは、河童が胡瓜を好むと言ひ伝えていことによる。

辞典に載つたのはかなり遅い。『広辞苑』では、昭和五十八年の第三版から見える。ただし昭和四十四年の第二版には、「かっぱ(河童)」の項に、「⑥キュウリの異称。」がある。昭和三十一年に出た榎垣実『隠語辞典』には、胡瓜をかっぱと言うのは東京の青物市場の隠語で、明治からあると記す。わたくしの乏しい食生活の記憶では、かっぱ巻きは昭和三十年ころにはあつたと思う。

河童が胡瓜を好むというようになつたのは、江戸後期からのようだ。小野蘭山の『本草綱目啓蒙』(三八)に

は、河童は「性、好ミテ胡瓜及ビ白柿ヲ食フ」とあるが、喜多村信節の『筠庭雜録』(中)には、河童の様子が

胡瓜に似ているので、江戸では胡瓜をカッパと呼ぶと思つている者が多いが、そうではなく、彼が好む物だからだ、とある。この文からは、胡瓜が河童の好物であるという事は、広くは知られていないように見える。天保四年(二八三三)の『柳樽別編』(上)に、「かっぱを皿へ居酒屋の三盞酢 花菱」という、胡瓜をカッパと詠んだ句がある。

ちかごろは、河童巻きをレインコートと言うことがある。洒落のつもりだろうが、こう言われると、撥水油の匂いがしそうだ。シャコをガレージなどとしてあると、その鱈屋はガソリン臭

が何百人もいて、全体がよくわからぬ。暗室もあるのかどうか知らされない。何人かの同期生と言葉を交わすようになったものの、特に親密というでもなかった。デモがあるという、報道写真を指向しているものはカメラを持つて飛んでいった。撮られた写真は記録になる、後で裁判や公安の証拠になるのではないかと考えると、私にはどうも違和感があつた。そのためいつか写真部からは足が遠のいていた。

(立松和平小説「第三巻より抜粋・つづく」)



いように感じる。ましてキス(鱈)が接吻だと、板前がスケベエで手が汚れていそうな気がする。

#### ○稲荷鮓

二つに切つて甘く煮た油揚げに酢飯を詰めたのが稲荷鮓だ。栃木県に生まれ育つたわたくしは、甘く煮た干瓢で巻いて米俵のようにするものと思つていたが、必ずしもそうではないようだ。栃木県では干瓢が特産物だから、鮓屋は言うまでもなく、家庭でもそういう形にするのだろう。

油揚げは狐の好物、狐は稲荷神の使者、それでイナリということになる。信太鮓と言うのは、安倍保名に助けられた白狐が葛の葉姫に変身して保名と夫婦になり、子の晴明を産むが、本物の葛の葉姫が現れたので、狐の姿に戻り、「恋しくは訪ね来て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」と詠んで去つて行く、という説話による。こ

メーブルマガジンの登録申し込み・取り消しはこちら

の説話は江戸初期から見え、淨瑠璃『芦屋道満大内鑑』で広く知られた。

『守貞謄稿』(生業下)には、油揚げの一方を裂いて袋形にし、茸・干瓢などを交ぜた飯を中に入れ、行燈に鳥居を描いて、稲荷鮓あるいは信太鮓と言つて夜に売り歩いた、名古屋には以前からあり、江戸でも両国あたりの田舎の人を客とする鮓店には前からあつたか、とある。いろいろな噂を集めた藤岡屋由蔵の『天言筆記』(四)には、弘化二年(一八四五)十月から稲荷鮓が大流行し、一つ八文で、山葵醬油で食べる、日暮れから夜にかけて辻の露店で売つた、「坊主だまして還俗させて、稲荷鮓でも売らせたや」というのはやり唄があつた、とある。古くは油揚げを煮ていなかったようだ。

### ○バッテラ

主として関西で鮓の押し鮓をバッテラと言う。バッテラはポルトガル語

らだ。今はかなり薄切りだったり細切りだったりものが出るが、かつてはもつと厚切りだったから、囃めばガリという音がした。

『広辞苑』では、昭和三十年の第一版には無く、昭和四十四年の第二版から見える。昭和三十一年に梅崎春生が『東京新聞』に連載した小説『つむじ風』に、「…そして種がかわるたびにガリ(しょうが)をつまんで、口内

Bateriaで、ボートのことだが、日本では船に搭載するボートに限定して用いた。鮓鮓に言うのはその形が似ているからだ。牧村史陽『大坂ことば事典』に、「明治二十七、八年頃、戎橋北詰やぐら

鮓の職人が、順慶町井戸の辻(新町橋東詰二筋東)にすし常という店を開いた時、はじめて考え出したもののだといわれる(鮓竹主人阿部直吉老人直話。その頃、このしろが大変安かつたので、それを鮓に使うことを考えてみた。このしろを二枚におろして片身を鮓の上ののせ、尾をピンと上へはね上げた格好がボート(当時はボートといわず、バッテラの語を用いていた)にちよつと似ていたので、誰いうとなくその形にバッテラの名を付けたのである。のちにこのしろの値が高くなつたために鮓にかえたのが今日の鮓の生ずしのもとになつたもの。」とある。

ちよつと気掛かりなのは、ポルトガルからの外来語は、普通は江戸初期にの味を消す」とあるのが、わたくしの知つた古い例だ。わざわざ(しょうが)と注を付けているのだから、当時はあまり知られていない語だったのだろう。しかしガリという語はもつと古くからあつたのではないかという気がする。『広辞苑』第一版では、隠語めいた語なので載せなかつたのではなからうか。

最後にスシそのものを記す。語源は

### 近刊書籍

## 伴大納言絵巻 冷泉為恭 復元模写

中野幸一 編

菊倍横変形判・定価八四〇〇円(税込)

原本の失われた部分を考証再建し、剥落部分を補筆。成立当初の姿を復元。

復古大和絵師 冷泉為恭の命がけの復元模写。

本書は、歴史画を得意とし、有職故実に詳しい為恭の模写というばかりでなく、国宝の絵巻の剥落欠損の部分すべて復元している点、価値の高い絵巻と考えられる。通常絵巻の模写は、剥落損傷や虫損の部分までも細密に写し取る、いわゆる剥落写であるが、為恭の模写は、できるだけ原絵巻の当初の姿の模写を、彩色紋様に至るまで鮮明に復元している。

※詳細のパンフレットはこちらです。  
ご入用の方は、小社までお問い合わせください。

## 謡曲画誌(うたいのえほん)

### 影印・翻刻・注解

小林保治/石黒吉次郎 編

四六倍判変形・定価一五七五〇円(税込)

近世謡曲の享受を知る重要資料を翻刻・影印。

享保二十年刊『謡曲画誌』を影印。

利用の便宜のため、板本の文章を翻刻し、略注・現代語訳を施した。挿絵は原本に近い寸法で掲げ、鑑賞の参考に簡単な説明付す。

更に、本書についての解題も載せた。

【謡曲画誌について】

謡曲画誌と書いて、「うたいのえほん」と読む。謡曲五十番を取り上げ、各曲のあらすじや、その元となる史実、物語の背景を写実的な挿絵を盛り込みつつ解説している。江戸中期における謡曲理解・謡曲受容の美態、更には古典芸能の重要な側面を知る上で貴重な資料である。

見られ、以後は少なくなるのに、バッテラは、船の意味のものでも江戸後期からしか見えないことだ。

### ○あがり

お茶をアガリと言うのは、アガリバナの略で、明治末ころから用例が見える。これについては、『大辞典』の説明が詳細を極めていて、これで十分だ。

アガリバナ 上花 新しく煎じた茶、煎茶のばな、また一般に茶のこと。東京遊廓用語。物でぎは・でかけをでばな(出端)といふ。その出を忌んで言ひ変へしものか。また娼妓の「お茶をひく」を忌み客の上つて来るやうにとの意をも含めて言ひ習はせしものか。略して上り。

### ○がり

生姜の酢漬けをガリと言うのは、齧つた時の音(というより感じだろう)か

形容詞「酸し」を名詞としたもの、すっぱいということだ。調味料では、辛いからカラシ(辛子)と言うのと同じだ。漢字では「鮓・鮓」と書く。漢字の本来の意味は、「鮓」は酢漬けの魚(鰯)、「鮓」は魚の塩辛(説文解字)という。そうだとすれば、「鮓」のほうがスシに近いことになる。「寿司・寿し」などは、日本でめでたい字をあてたものだ。

(つづく)



◆◆ Web ページのご案内 ◆◆ <http://www.bensey.co.jp/>

近刊を含む書籍の内容紹介から、新刊・既刊書籍のご購入、最新ニュース・書評掲載情報など。

◆◆ ご注文方法 ◆◆

- ① web ページによるご注文 <http://www.bensey.co.jp/howtobuy.html>
- ② 電話・FAX によるご注文 電話：03-5215-9021 FAX：03-5215-9025

◆◆ お支払い方法 ◆◆

銀行振込・郵便振替・代金引換\*・クレジットカード\*\*等がご利用いただけます。  
(いずれの場合も、送料が別途 300 円かかります)

- ① 銀行振込の場合  
三菱東京 UFJ 銀行麹町支店普通 3848245 ベンセイシュッパン(カ)
- ② 郵便振替の場合  
00120-3-41856 勉誠出版株式会社

\* 代金引換の場合、別途代引手数料として 315 円かかります。  
(ご注文が 3,000 円未満の場合のみ)

\*\* クレジットカードのご利用は、当社サイトからのご注文に限ります。

投稿募集

「勉誠通信」へのご寄稿を募集いたしております。現在のご研究内容の紹介や、ご興味をもたれていることなど、「自由にお書きいただければ」と存じます。

◆ 執筆分量・誌面二頁（一五〇〇字程度）ないし三頁（二三〇〇字程度）  
写真などが入る場合は、文字数をそのぶん減らしてください。

四〇〇字を目安に、適当な小見出しをお付けください。

◆ 入稿形式・テキスト形式（ワード、一太郎形式も可）

◆ 謝礼・ご執筆誌面一頁につき一〇〇〇円分のポイントをお渡しいたします。  
ポイントは、小社の書籍を直販にてご購入いただく際にご利用いただけます。

◆ お問い合わせおよび送付先：[mninfo@bensey.co.jp](mailto:mninfo@bensey.co.jp)  
メールアドレスに「勉誠通信原稿」と明記してください。

編集後記

去る十一月十二日（金）に、『書誌学入門』を読んで和装本に興味を持ちはじめてきたこともあり、東京古書会館にて開かれた「古典籍展観大入札会」に足を運んできました。弊社からも刊行している『芥子園画伝』や、『大織冠絵巻』をはじめ、名品の数々を生で、しかもじかに手に取って触れることができました。

一方で、その翌日は秋葉原で開催された「電子書籍・コミック・サミット」に行きました。話題の iPad や Kindle、Reader をはじめ、中国や台湾の電子書籍端末も展示されており、こちらもまた実際に手に取って使用するすることができました。

リアル書籍と電子書籍。もちろんどちらもそれぞれ長所あれば短所もあり、一概にどちらが良いとは言えません。今回の一見相反する展示会に参加しながら思い出したのは、ある書店員さんのおっしゃっていた「どちらを選ぶかはお客様次第」という言葉でした。

さて、今年には「電子書籍元年」と声高に言われていますが、弊社でも今月から電子書籍を刊行します。第一弾として『戦国残照 お江とその時代』ほか、これまでに紙媒体で刊行してきた書籍を発売します。従来通りリアル書籍も刊行を続けていきますが、新しい試みにもご期待ください。  
(坂田)